

ex 268

565

大阪北教會略史

文部省
印刷局

The North Church of Osaka, the first decade of whose history is contained in the following pages, affords a good illustration of the manner in which the Kingdom of Heaven is being set up in the world. From the little grain of mustard seed it has grown into a great tree in the branches of which the birds of the air may lodge. The work which has been done in building up the Church has been abundantly blessed of God, and the success which has been attained is due first of all to His grace. Some have planted, others have watered, but it is God who has given the increase. Those who have borne the burden and heat of the day and those who have wrought but one hour may well rejoice together, for their labor in the Lord has not been in vain. Many souls have been brought out of darkness and sin and led to know the blessedness of salvation. Some of these have already been called away to join the general assembly and church of the firstborn, which are written in heaven (Heb. 12: 23.) But others have come in to take their places. A decade is a large part of the life of any man. But as we look back upon the history of this church it seems but a little while. We can recall many trials endured, many difficulties encountered by the way, but now that the ten years are past we gladly forget all such things and think only of God's goodness and of the joy which He gave us in working for the Church.

While we look at the past with gratitude, we would also look toward the future with hope. What will be the history of this Church during the coming decade? This no man can know. Much will depend upon circumstances over which we now have no control. But much also depends upon the spirit and faith of those who now belong

to the Church.
The Church is the child of many prayers. God who has heard these prayers in the past will hear the prayers of His people as they pray for a still greater blessing in the future. While we rejoice with the church as she sets up her Ebenezer, saying, "Hitherto hath the Lord helped us" we also look to the future confidently expecting still greater things.

T. T. Alexander,
27 Tsukiji, Tokyo,
March 27th 1894.

...

特 29
767

大阪北教會略史序

本書載する所の大阪北日本基督教會第一次十年間の歴史ハ以て天國の此の世ニ設立せらるゝ方法及び順序を例證するの好事實とあす足らん本教會ハ微小なる茶種より成長して大なる樹となりぬ空の鳥其の枝ニ宿るとを得可し之を建設するは用ゐられたる努力ハ大ニ神の祝福を屢ふしたり而して既ニ得たる所の成功ハ之を第一ニ神の恩寵ニ歸せざる可からざる或ハ樹ゑたり或ハ水ヲ灌きたり然れども實のりを與へし者ハ神かり重き責任を抱きて晝間の炎熱ニ苦みつゝ働きてし者も若くば唯だ一時間の務を

二
せし者も皆共々喜ぶを以て當然とす何と云はれん主よ於け
る彼等の勞働空しくならざれば也多くの靈魂は暗きと罪と
の内より導き出だされて拯救の祝福を知るに至れり其内
數人の既に此世より召されて天に録されたる總會及び長
子どもの教會に加入するを得たり(希伯來書十二章廿三節
然れど又他の數人來りて之に代り十年と云へば人の生
命よ於て大なる一部分を占むる者也然れども此の教會の
歴史を回顧するに十年は唯だつもの間の如く見ゆ我儕は
多くの試練を経過し多くの困難に遭遇せしを記憶す然れ
ど其の十年は既に過ぎぬ我儕は喜んで凡て是等の事を

忘れ唯だ神の恩寵と我儕が教會の爲めを勞働する間に神
の賜はりたる喜びを思はんと欲す
我儕は神に感謝するの念を以て過去十年を顧ると同時
希望を以て將來を望まんと欲す來る十年間に於ける此の
教會の歴史は如何なる者ならん何人も之を知り得ざる
可し是れ吾人が今支配するに能はざる状況よる者多か
らん然れどもまた其の運命は本教會に現在する人々の精
神と信仰とに由りて定まる者亦多かる可しと信ぜ本教會
は多くの祈りの子なり既往よ於いて是等の祈りを聽き給
へる神は其の民が將來よ於て猶ほ大なる祝福を得んとて

祈る所は應へ給ふ可し我儕は本教會がエペチセルの
石を建て、エホバは是れ迄我儕を助け給へりといふ方り
共に欣喜すると同時に將來に向つて更なる大なるを信じ
て望む者也

一千八百九十四年三月廿七日

東京築地廿七番

ナ、ナ、アレキサンドル

大阪北教會畧史

第一 教會起原

明治十五年三月米國宣教師アレキサンドル氏東京より来て川口十四番館に
寓居し是より在教の方を定め七月に至りて説教所を西區松島高砂町八十一
番地と創設して福音を宣ふ舊一致教會大阪の傳道此に始まる幾もなく之を
京町堀通三丁目十四番地に移轉す八月北區中の島常安町廿六番地野邊氏の
宅に集まりて神に祈し併せて聖書を講ずるの會を設く教會の祈禱會此に
起る九月又た説教所を北區老松町三丁目六十一番地に設く是より先き五月
宣教師ボートレ氏の金澤より来てアレキサンドル氏と俱に斯道を傳へ又た
青山彦太郎世尾昇造近藤彌平長谷川秋平野邊盛正の諸氏此地に在て其傳道
を助けたり但し青山近藤世尾長谷川の四氏の馬關教會野邊氏の東京芝罘月
町教會の信徒ありしと云ふ十一月女教師ガルヴキン及びヘンソンの二氏傳



道の爲に米國より來て川口に寓居す尋で傳道師加藤覺氏も亦た東京より來る是に於て皆俱に傳道に從事せり。十六年一月稻澤謙一氏等二人に洗禮を施し且晚餐禮を行ふ是を晚餐洗禮を施行するの始とす尋で京町堀説教所を轉じて其上通二丁目三十三番地に置き又た老松町説教所を移して東區高麗橋四丁目七番地に置く是より始めて安息日學校を開きたり五月又た説教所を南區清水町上の町三十番地に設け加藤氏此より住す衆之を南と曰ふ因て高麗橋説教所を北と稱し南北の稱此に始まる尋でポートル氏金澤に歸りヘツソル氏も亦た轉じて金澤に赴き京町堀説教所を廢す是より於て説教所の清水町高麗橋の二所となりアレキサンドル氏等交も集まりて説教講義祈禱等の會をさせり十二月基督の降誕を祝す來り會する者小兒を合せて七十餘人其消費十一圓を支出せり南北クリスマスをなす是を始とす當時宣教師フツシヤー氏米國より來て川口に寓居せり此間洗禮を受けたるの稻澤氏を始として近藤彌平氏の室わさ子竹内耕吉氏

及び其家族にして其數六人なり但し稻澤氏は是歲三月東京築地大學校に入學せりと云ふ初め説教所を設置するや困難の事情甚だ多し或の世人未だ吾教の何たるを知らず徒よ之を嫌惡するが故よ一時適當の地に之を設くるも遂に家主の逐ふ所とあるが如き或の適當の家を相して之を借らんとするも吾徒の皆寄寓者なるが故に其保證者を得ざるが如き或の土地に熟せざるが爲よ知らず識らず他教會講義所の附近に設置して偶々其感觸を惡しからしめたるが如き一々枚舉は違わらず而して遂よ之を高麗橋に設け又清水町に置くを得たるの一の浪花教會の執事福島氏の保證より一の竹内氏の入會より基きしものにして蓋し神の深き攝理に出たるものならん

第二 南北分離

十七年一月廿九日衆相議し布教上其属する所を定めて南北より分離せり蓋し行路懸隔し傳道の便ならざるより由るものあり是より於て北の高麗橋の説教所を轉じて北區中の島五丁目野邊氏の宅に置き是を大阪北一教會と稱し以

て自給獨立の教會となり且南北此に對立して共に吾一致教會の基礎とならんことを期せり教會の稱此に始まり自立の精神亦た是に確定す是より衆愈よ心を協せ力を觀せて其進歩を規畫し各其所得十分を獻じて教會維持の計をなし又徒に説教祈禱講義の諸會に従事するのみならず或は親睦の地を會して互に親睦し以て相愛の道を盡し併せて廣く交を求道者に致す是を親睦會の始とす又或は婦人野邊氏の宅に集まり講義祈禱等をあして其信仰を進め併せてガルヴソン氏を師として編物の方を學び又た其方を求道の婦女に授け以て傳道の一助とす是を婦人會の始とす又た傳道師を得んと欲して百方之を索め或は東京の教師ナックス氏及び安川亨氏等に依頼して頗る盡力せり然るに是時當り其屬する所の信徒僅に七人即ち飯田景武野邊盛正其配と松山まつ伏田貞次伊藤善吉村井芳介の諸氏に過ぎず故に説教祈禱の諸會の如き其會する者動もすれば或は一二人に過ぎず或は婦人一人にて祈禱會をさせしことあり故に佑助を天父に求むるの心の却て愈

四

よ益す切なるに至れり但し村井氏の山口教會伏田氏の馬關教會伊藤氏の東京淺草教會松山氏の同上新榮町教會の者にして飯田氏の山口教會の長老なりしと云ふ

當時アレキサンデル氏の事小大となく其囑託を受け或は教を説くこと教師の如く或は道を傳ふること傳道師の如く或は衆を導き教會を治むること牧師長老の如く或は百般の事を指南すること師傅の如く誘掖薫陶懇切なりき然れども毫も干渉するの跡なく能く衆の自治發達するに任せたり先達の後進の徒を導く往々干渉して其發達を害するものなりア氏の卓見あるにあらざれば何ぞ能く此の如くなるを得んや

十七年三月田母神しを子に洗禮を施す吾教會の洗禮是を始とす又た説教所を北區堂島南仲町二丁目二十番地松山氏の宅に移轉す是より先松山氏の堂島裏町三丁目廿一番地に住し十六年十月よりガルヴソン氏と俱に安息日學校を開き近傍の子女を集めて之を教へたりし此に移りてより生徒益す増

加し毎回教を受ける者四十人より五十人より及ぶ是より於て野邊さま、村井芳介、高木某の三氏を教員に加ふるに至れり。是れ小兒安息日學校の起り。當時飯田氏の日東捕鯨會社と云ふ社の役員たりしに由て傳道の端緒となり其社員ある阪戸岡部中山古川乾の五氏に道を傳へ遂之をして入會せしめ是より漸次其歩を進めたり爰に説教所を高麗橋に設置せし以來金を儲して之を某國立銀行に蓄積したりしもの若干其銀行閉店して遂之を損失したり以て當時の會計餘裕ありしを知るべし。又北區天満壺屋町邊見惟武氏の宅に於て婦人の祈禱會等をなせしことあり邊見氏の求道者にして能く金を寄附し以て吾教會を補助せられたり。

十七年五月東京本郷教會の長老たりし吉岡弘毅氏を傳道師として招聘し其諾を得たり。是れ安川教師の斡旋に由るものなり是より先衆傳道師を求め相會して熱心祈禱したりし。此に至り皆大に悦びて之を感謝せり。九月吉岡氏來る衆北郊大仁村玉藤に會して之を歓迎せり。會する者三十五人は於て衆

熱心愈よ加へる。

十七年十月教理に關する書籍を備へて講究を供し。又の求道者に貸與して傳道の一助となすの會を設く。是を成全會と曰ふ。蓋し義を提摩太後書第三章十七節に取られたるものなり。是れ會員の出資を以て書籍を蒐集するものにして、當時會員二十二人居附を受たる書籍も亦た少からず。

第三 教會成立

十八年三月會衆漸く増加するに因て仮會堂を創設せんことを議定し。中の島玉江町十一番地を相し其内外を修繕して之を會堂とし。四月捧堂式を執行して諸會を此に移す。是より中會の認可を得。五月六日其例規に従ひ會吏を選擧して其建設式を執行せり。教會の組織此に成る。衆欣喜神の恩の厚を謝せり。此時會する者凡そ七十人。又た選舉せられし長老の吉岡弘毅野邊盛正の二氏執事。中山操太三森正山本秀作の三氏あり。但し吉岡氏の傳道を主とし野邊氏の治會を主とするものあり。

十八年十二月

八

米國傳道會社の補助金(毎月凡金十五圓)を辭す教會の自立此に成る是に於て衆亦大に悦び 神の恩の優渥なるに感ず當時衆喜びて金を獻じ會堂創設の資の如き其額六十圓の多を要するも猶は自ら之を給し能く其獨立を表するの精神に富むと雖も教會建設の際しての會衆僅に三十人にして或の未だ十分なる自立の目的を達する能のざらんことを慨歎せり爾來僅に七月其數稍や増加すと雖も未だ五十人に過ぎざりし而して能く此の如く自立するに至る是固より 神の賜恩に基くと雖も亦た其勤儉奮勵恒祈の力與りて大なりと謂ふ可し。

是の月執事三森氏の米國聖書會社の命よ因て教を琉球に傳へんが爲に聖書の販賣を兼て其地に赴く是を琉球傳道の始とす蓋し三森氏の實よ身を獻じて此任に當れるものなり。

十九年一月北の新地裏町加古氏の宅に於て傳道の爲に毎週一回聖書の講究會を設け吉岡氏往て之を講ず三月大仁村阿波氏の宅を傳道所と定めアレキ

カントル氏及び吉岡氏等往て説教會をあす衆も亦た往て其傳道を助く此會毎月二回として聽衆多く一時昌盛なりし尋で此に小兒安息日學校を設く蓋し教會傳道地を開く是を始とす。

當時又た大和御所町を傳道地としアレキカントル吉岡中山岡部の諸氏交も往て教を傳へ伴直之助氏の姉すみ子も亦た之を助く遂に講義所を該地に設け傳道者手塚新氏をして此に住せしむ時森田覺氏收稅官吏を以て其近郷八木町に在り相應じて其寓所を講義所とし手塚氏と俱に亦た其所に傳道せり御所町の傳道の嚮に山田滿國氏收稅官吏として出張し其室いそ子と俱に熱心之をなしたるに始まると云ふ。

十九年四月フツシヤ一夫人及び櫻井ちか子の主唱に因て婦人傳道及び慈善を務むるの會を設く是を婦人傳道會と稱す蓋し米國の例に倣ひたるものにして毎月一回集まりて祈禱勸話をなし旁ら編物等の手藝をなして金を醸し斯道の資を造るものなり是より數月の後此會パールシヤ國饑饉に因て其民

の慘狀を極むるを聞き金を贈りて之を救恤したりと云ふ六月曾根崎村字住の江宮脇氏の宅に於て傳道の爲に毎週一回聖書の講究會を設け吉岡加古の二氏往て之を講ず會する者毎回凡そ二十五人頗る好況なるを以て遂に同所小櫻橋の傍に講義所を設く九月長老野邊氏其職を辞す衆議遂に之を可とし中山操太加古兌の二氏を長老に選補し并に伊東章藏岡部久吉の二氏を執事に選舉す。

二十年三月衆友會と稱する一團を組織して頗る力を傳道及び慈善に竭し或の演説討論を練習し又た上福島村字上の天神の傍に講義所を設け毎週一回説教會并に小兒安息日學校を開く但し此講義所の初め婦人吉岡氏等二人の出資を以て之を起し既に傳道したりしに因り此に至りて其所屬とするを得たるものあり又た此に住して終始盡力したるの大手萬吉勝木豊の二氏なりと云ふ。

二十年九月アレキサンドル教師米國に歸らんとす衆大之が別を惜み川口

フツシヤー氏の館に會して悵然として之を送る是時師離別の辞を述べ故國を出る時の涙復た此に流ると曰ふ是れ離恨の情を盡したる者にして復た此に流ると云ふ切なる一言と共に出たる其一滴の更に無限の情を含み此に至りて再び師の顔を仰瞻ると能はざりし今會堂に掲げたる寫眞の衆其別を悲みて師と俱に撮影したるものなり以て當時の狀を推知すべし此日南北より會する者凡そ百七十人嗚呼師遂に去る。

二十一年二月衆議して大塚武氏を長老に選舉し上村半四郎信時義政の二氏を執事に選補せり但し上村氏の幾もなく監督教會の傳道者となり岡部久吉氏も亦た一年を間て同傳道者となれりと云ふ。

第四 賜堂

二十一年三月卅一日會堂落成するを以て捧堂式を執行す是より先十九年四月會衆愈よ増加し仮會堂狹隘となるに因て會堂の建築を議し野邊盛正山本秀作中山操太加古兌阿波松之助等六氏を建築委員としアレキサンドル氏を

其顧問とし、爾來其資を募集す、衆之に應じ直に豫約を訂する者其額四百四十餘圓、十二月に至り、遂に八百二十九圓餘の多額を収入せり。因て委員並に有志者等東西奔走して其土地を搜索し、翌廿年七月に至りて中の島常安町卅六番地を相して之を買得せり。尋で猶ほ其資を募集するに復た之に應じて豫約を訂する者其額七百十餘圓に及べり。是に於て建築師草場某、其工事を命じ、且京都より技士河村貫藏氏を召て之を督せしむ。十月工を始め、十二月堂宇成る。尋で門牆を造り、什器を備へ。本年二月に速びて内外役を竣れり。是に於て衆大に歡喜して此式を擧げ、神の恩寵の豐滿なるを感戴鳴謝せり。此日會する者多く、滿堂立錫の地を餘さず甚だ隆盛なりし。此時現在の信徒の其數百三十三人(小兒十四人を除く)。

建築委員を擧てより此に至るまで三星霜其間幾多の困難勞苦を経て之を成就す。固より衆の勤儉の結果に由ると雖も、委員の功勞亦た與りて大なりと謂ひざるべからず。但し此計畫の起り十八年十二月以前に在り、當時出納者の殊

は經費を節し、剩餘を蓄積して、其資を準備したりと云ふ。

又た之を經營するや、土地を購ふに金八百五圓、堂宇を建つるに金七百十七圓餘、門牆及び器物等に金百三十四圓餘を支出し、通計金千六百六十三圓餘の多額を要したり。而して之が爲に毫も負債を生ずる等のことなく、悉く募集金を以て支辨せり。是れ亦た衆の勤儉の結果と當局者の措置宜しきを得るの致す所に由るものあり。但し募集全額の中金三百十圓の米國人の出す所にして、他の皆本邦人より募集したるものなり。

又た委員の外に在て特に土地買得の事、周旋したるに、三森正西、脇太七郎、上村半四郎の三氏、門牆等の工事に盡力したるに、内藤友次郎氏、收支の計算を整理したるに、中庭彌七郎氏等あり。其他時に臨みて周旋奔走等の勞を執りたる者、一枚擧げ違わらず。但し三森氏の此時、期滿て琉球より還りたるなり。

是時土地及び會堂の名義人を定め、阿波松之助、伊東章藏の二氏を以て之に當て、且財産管理人を置き、大塚武、信時義政の二氏を以て之に任せり。

嚮に資金募集の際櫻井照憲氏が其衣服の新調を備へたる金を献じ以て衆を奨励せしことの時人口は増大せしところなれども其他富者が自奉を減じて大金を出す如き貧者が衣服を賣り學生が用度を省き及び老幼僕婢の献金等美談固より少からず然れども我儕の之を記するの益なきを信す何とあれば我儕の唯微力にして斯る堂宇を得是れ神の恩賜なれば嗚呼誰か之を捧堂と曰ふや我儕の寧賜堂と曰ひ以て其榮を神に歸せざるべからざるの一あるのみ。

第五 牧者離合

廿一年四月吉岡傳道師高知教會の切なる招聘を受け神旨に出たりと信するの故を以て其職を辞す衆議數回遂に之を可とす然れども師の後任者を得て後去らむと欲し猶ほ留まるる三閱月是より先師の信徒の増加するに隨ひ交通疎し流れ當初互に相親睦し相慰籍し相勸奨して得たる所の裨益の漸々減じ去らんとするを恐れ組を分ちて團結するの會を設く是を組の會と曰ふ。

其方法の組を分つゝ信徒の住所を以てする者にして第一より第三に至る組毎一長を置き毎週一回の集會をなし或の聯合集會をなすものあり五月衆其後任者を求め會堂に集まり祈禱すると連夜五日及ぶ適宜師大會の爲に東上せんとす因て其候補者を薦擧し且之を招聘するの任を託せり然れども未だ其人を得るに至らず終に六月を以て單身高知に赴かんとす衆玉藤に會して其別を悲しむ是時師留別の辞として基督の意を以て意とす可しと曰へり是れ永く念に記して當に訓誡とすべき者あり時に長老大塚氏も亦た轉じて東京に行かんとす因て併せて其別を送る此日南北より會する者凡そ百五十人師遂に去る。

師吾教會に在る殆五在外力を傳道に致し以て多く有爲の士を導き内熱心衆を教誨し以て能く其信仰を固くす當時創業日猶ほ淺く固より困難少からず然れども内外力行ふこと此の如し故に駸々として日よ月に大に進歩せり此間衆特に勤勵恒祈 天父の保佑を受けて自立の教會と成り。

又た會堂を建つるに至りしハ職として師の薫陶に由るものと謂ふ可し其配吉岡氏も亦た外能く教を傳へ内能く姉妹に親み曾て偏愛せしことあし故に其感化を受たる者頗る衆く美蹟猶は談柄に存せり

是に於て恰も羊群牧者に離れて岐路に彷徨すと一般百方其後任者を索むれども得ず頗る窮困感迫せり因て衆議數回八月に至り長老中山氏を委員とし之に囑するに牧師又ハ教師を聘して還らんことを以てし遂に東京及び横濱に派遣せり是に於て衆の會堂に集まりて復た祈禱會をなし連夜十日に及ぶ中山氏の横濱に向ひ東京より出で教師奥野昌綱氏を聘せんとして之に請ふ事情切迫の故を以てし期するに三月を以てし遂に其諾を得て還る是に於て皆積日の愁眉を開き會堂に集まりて感謝すること連夜三日に及べり

廿一年九月奥野教師東京より來る衆欣喜復た感謝の會をなす讚美の聲期せずして堂に滿り尋で櫻の宮に會して師を歓迎す集まる者凡そ八十餘人時よ吉岡夫人高知に赴かんとす因て并せて其別を送る是より師を以て假教師と

し猶は其任期を延べんことを請ふ師又之を請せり

當時大塚氏適ち東京より來る是より先大塚氏の東京に在て教師招聘の爲に幹旋の勞を執りたるに因り衆其招聘委員たりし中山氏と共に之を會堂に招きて其勞を慰せり東京の教師井深凝之助氏も又た牧師招聘の爲に一臂を添へられたりと云ふ

是より先六月フツシヤ一教師米國に歸らんとす衆其別を惜み南教會と俱に南地四海亭に於て之を送る會する者凡そ百人其配フツシヤ一氏の去るに臨み婦人傳道會に金十圓を寄附せり師遂に去る尋で婦人傳道會の傳道師高木氏并に井上某近藤りん阿波ゆき子等三人を播州多可郡津萬町に遣りて傳道せり蓋し該地の加古免笹倉彌吉氏等の郷里にして津萬町の傳道此に始まる

廿一年十月宣教師ポートル氏金澤より來て川口に寓居す是月委員を定めて教會の憲法草案の適否を調査せしむ十一月吾一致教會臨時大會を此地に開く因て南北及び備後町講義所に屬する者等相議して委員二十四人を選擧し

其担当を分ちて通信會計會場宿所の四種とし之をして其周旋をなさしめたり。蓋し備後町講義所の宣教師ハスト氏の創設したる所にしてハ氏の櫻井照惠氏と俱ふ此所に於て傳道せり。是月長老加古氏郷里播磨に歸らんとす。因て堂島伊東氏の宅に會して其別を送る。尋で其職を辞す。十二月衆議して加古氏の辭職を可とし。野邊盛正阿波松之助の二氏を長老に選補す。又執事三森氏の辭職を可とし。山本秀作渡邊爲藏の二氏を執事と選補す。當時宣教師ウードホール氏米國より來て川口に寓居せり。

廿二年二月奥野牧師期滿るを以て東京に歸らんとす。衆託するに後任者招聘の事を以てし。其去るに臨み玉藤に會して其別を悲しむ。是時師の力を盡して其牧師を得せしめんことを期し。慰藉の辭最も懇切なりし。此日南北より會する者凡そ百五十人。當時青年者團結して傳道に従事し。且演説を練習するの會を設く。師之に命ずるに顯榮會の名を以てし。遂に去る。

師吾教會の事情の切迫を辨み。時に巡回傳道の事あるに拘へらず。來て之

を牧す。恰も羊群の飢渴彷徨中。牧者よ再會して水草を得たるに均しく衆を欣喜踴躍殆ど復活の思をなせり。師教を志す周到毎に涙を流して説く。聽者感動せざるなし。齡古稀に近きも猶は肢體矍鑠として衆を奨励す。故に其感化を受け所謂信仰に勇氣を得る者少からず。師去るに臨みての衆庶を堂に會し。單身教を説て。連夜六日及ぶ。毎會聽者凡そ百五十人。其熱心道を傳ふること亦た此の如し。故に此地に在る僅に五月而して洗禮を受たる者の四十八人の多し。至る師特よ力を竭して後任者を得る。に至らしめたる。其功最も大なり。と謂ふべし。

第六 牧師來去

廿二年三月東京芝教會の牧師たりし和田秀豊氏を招聘して其諾を得たり。是れ奥野教師の盡力よ由るものなり。四月和田牧師東京より來る。衆中の島中山氏の宅に會して之を歓迎す。是より始めて牧師を得。衆大に安堵せり。

廿二年九月アレキサンドル教師復た米國より來て川口に寓居す。衆大よ之を

悦ぶ。尋で天満曾根崎堂島等へ往する信徒相謀りて。講義所を曾根崎村九百八十一番邸へ設け。是を曾根崎講義所と曰ふ。是より先此地の信徒互に其宅に會して。毎週一回聖書を研究し。頗る其益ありしを以て。此其會を移して之をなし。併せて其交誼を厚くし。或の毎週一回説教會をなして。傳道を務め。或の小兒安息日學校を開きて。近傍の子女を教育せり。後ち一年にして之を北野村字梅が枝へ移轉し。北野講義所と改稱せり。此講義所の説教の専らアレキサンドル氏に倚頼し。其維持の其信徒の自給に依る。然れどもアレキサンドル氏の寄附金を受たるとも亦た少からず。又た此講義所の爲に終始盡力したるの。内藤友次郎中庭彌七郎津川敏樹の諸氏にして。小兒安息日學校の教員となりて最も盡力したるの。笹倉彌吉氏及び鈴木はつ子ありしと云ふ。

廿二年十月教會の稱を改めて。大坂北教會とす。蓋し舊長老教會と合併し。共に改稱するに由るものなり。東西南北教會の稱此に始まる。衆之を總稱して四教會と曰ふ。十一月和田牧師不適任の故を以て職を辭す。衆驚愕相議して可かず。

十二月フツシヤ一教師復た米國より來て川口へ寓居す。衆之を悦ぶ。

廿三年二月ポートル教師轉じて京都に行く。衆其別を惜む。然れども之を送るの暇あらざりし。

師の當初金澤より來てアレキサンドル氏と俱に此地の布教に盡力したる人あり。其再び來りしより吾教會の爲に或の教を説き。或の聖書を講じ。或の讚美歌を教へ。或の信徒を訪問し。以て裨益を興へたること少からず。

同二月衆議して。西脇太七郎氏を執事に選舉せり。又た長老中山氏郷里備後に歸らんとす。衆乃ち常安町和田氏の宅に會して其別を送る。尋で其職を辭す。翌三月衆議中山氏の辭職を可とし。其後任者を選補す。其翌四月長老野邊氏職を辭す。衆議數回遂に之を可とす。

廿三年十一月フツシヤ一教師其夫人の身軀風土に適せず。宿病再發の虞あるに因り米國に歸らんとす。衆其別を惜み。谷町講義所へ會して之を送る。師遂に去る。

師の夙に力を南教會の創業も竭したるのみならず亦た吾教會の爲に功勞少からず或の教を説き或の聖書を講じ能く衆を愛す特にアレキサンデル氏歸國の後に於て然りとす師が稟性の博愛なることの當時親炙したる者の能く知る所なり

其配フツシヤ一氏の婦人傳道會の創立者なり諸會動もすれば永演し難く概ね廢會或の停會となるに當り此會の獨り依然として存立し大に斯道の裨益をなせり願ふに其功德の此會と共に永久に傳へ且殊に其健康を祈らざるべからず又た此會嚮に傳道師を播州津萬町に遣りし夫人の寄附金を資として之をなしたるものなり今該地に假教會を設立するに至る是れ固より加古氏等の盡力に由ると雖も亦た此に益觸するものと謂ひざるべからず

廿四年一月新規則に依り年會を開く長老二人執事五人總て職を辞す蓋し執事を廢して更に長老を選擧せんが爲なり衆議之を可とし執事を廢し更に長老

老十二人を置く是に於て渡邊爲藏伊東章藏阿波松之助信時義政山本秀作西脇太七郎加古光坂修秋元止馬若菜清河中根庸等十二氏を長老に選舉す衆議喜北郊凌雲閣に會して大に之を祝す但し秋元氏の固辭して之を受けず衆議之を可とし遂に其選補をあさいりし

廿四年二月和田牧師芝教會の切ある招聘を受け神旨に出席し信するの故を以て其職を辭す衆議數回遂に之を可とす其去るに臨み有志者江戸堀某俱樂部に會して其離別を悲しむと云ふ師遂に去る

師吾教會を牧すると殆ど三年曩に創業日猶ほ淺く其事務未だ整ひざる者ありしを師來りて事を處する能く規矩を以てす故に會務整頓治體漸く具ひるに至る是れ其賜と謂ふ可し又た井上今田有馬植田品川村上服部等七氏をして明治學院或の東京傳道學校等に入學せしめたるの固より他に之を補助したる者なきに非ずと雖も亦た師の懇篤なる幹旋の力は職由せざるを得んや

當時顯榮會員相謀り、ウーレホル氏に依て講義所を下福島村堂嶋小橋の傍に設け毎週一回説教會及び小兒安息日學校を開き是を顯榮會講義所と曰ふ此創立に當り特に盡力したるの武田頼夫、中根庸、山縣茂雄、酒井惣男の諸氏なりしと云ふ

廿四年七月長老十一人總て職を辞す衆議之を可とし遂に其數を減じて三人とす是に於て伊東章藏、加古光信、時義政の三氏を選補せり嚮に和田牧師職を辞してより前後未有の困難を惹起して紛擾絶えず衆大之を憂ひ殆ど其堵を安せざることを數月殊に其間アレキサンドル氏を煩ひし且其心を傷ましめたる甚だ多し然れども遂に神の教護に因り此に至りて困難漸く終る適に東京の教師植村正久氏の旅行して暑を避けんとするを聞く是に於て衆議して師を聘し其教誨を受けて信仰を維持すると一月又た師歸るに臨み牧師の招聘の事を託し北地靜觀樓に會して其別を送る是時師英國茶話會の談をなして夫れ主客を遇し之をして愉快からしめんとするに其真情より出る懇

切なる談話と親密なる交際とを以てするに在り余英國にて招れし茶話會の其主の交話の懇親あること膠漆も音ならず實に至れり盡せり故に其響應の唯喫茶を以てすれども山海の珍味に勝り高尚優美其快今猶は忘るゝこと能はず本邦親睦會等をなすも亦た此の如くあらんことを望むと曰へり咄々世は飲食を以て交際唯一の具となし言と行とを以て人を悦ばしむることを願みず竟に驕奢は流れ又の巧言令色を事とし眞と愛とを以て之に接すること爲さず竟に輕薄は陥るの風あり教會も亦た時に此弊あしとせず是れ一の茶話に過ぎざれども亦た宜しく服膺して誠とすべき者なり師乃ち去る

師逗留一月日夜教を著して殆ど餘暇なし又た其説く所唯に説教講義のみならず多く勸話、懇談等の會に依て其教理の奥を開發す悉く實驗的なり故に聽者男女を問はず其信仰に知識と裨益を受たること甚だ多し

第七 牧師漸定

廿四年九月東京赤阪教會の牧師たりし大石保氏を招聘し其諾を得たり是れ

植村教師の斡旋に由るものなり。尋で大石牧師東京より来る衆北區若松町池田樓に會して之を歓迎す。集まる者六十人許而して一坐團樂和氣自ら生じて神の恩を浴するを謝し。懇談數時及びし。是れ亦た好集會なりし。是に於て衆融和協同せり。

廿四年十月東區高麗橋四丁目宇賀氏の宅に於て。毎週一回聖書講究會を開く。尋で亦た北區堂島仲二丁目伊東氏及び西區堀江野村氏東區淡路町二丁目田島氏等の宅に之を開設す。是れ傳道の爲に設けたるものにして大石氏往て之を講説す。同時亦た天滿會根崎等に住する信徒の宅に相輪轉して之を開設するものあり。是れ其信徒の研究を主とする者にして亦た大石氏の講授する所なり。十一月顯榮會講義所を改稱して福島講義所とす。是より顯榮會の干係を離れ。渡邊爲藏氏の專盡力する所となり。説教會の外に信時げん近藤りん子等を教員とし。毎週一回編物の方を教授して傳道を助く。後ち一年にしてウーイドホール夫人の貧民學校を此に開き。女教師ハナルス氏及び近藤りん望月すみ

同姓きく子等を教員とし。近傍の子女を集めて。毎日の之を教育せり。此講義所のウーイドホール氏の扶持と有志者の寄附とを以て維持するものにして。貧民學校のウーイドホール夫人の自弁なりしと云ふ。

廿五年二月規則に依り年會をなす。三月大石牧師の就任式を執行す。會する者凡そ二百五十人甚だ盛なりし。是月小會の報告信徒の消息等を掲載する月報を發兌せり。又た老婦人互に提携して其信仰の歩を進めんが爲に。毎月一回相聚まりて親睦するの會を設く。是を老人會と曰ふ。是月大塚武氏の復た東京より來住す。九月會堂の修繕をなし。並に器物を新調す。之に要したる費額の合計七十四圓其委員となりし。大塚武伊東章藏信時義政渡邊爲藏の四氏なり。十二月大石牧師の唱導に因り共勵會を創立し。會長委員を選擧し。分担を定めて

漸次之を擴張せり。廿六年一月女教師ハナルス氏音樂學校を會堂に開き。毎週一回讚美歌を教授し。大橋ちよ北條なを鈴木はつ子等交も其通譯等をなして之を助く。蓋し之を

教ふるよ正則を以てし、樂譜、音階、舉動等より漸次謳歌に及すものあり但し師の浪華女學校の教師にして二十年九月米國より來りしものあり二月規則より依り年會をなす是月吉川庚子を教會の傳道婦となす蓋し吉川氏の幼稚園に在て多年教育の任に當りしを深く感ずる所ありて之を辭し遂に傳道に従事するに至りしと云ふ

廿六年四月ガルヴン女教師米國より歸らんとす衆婦人殊に其別を惜み川口ウードホール氏の館に會して之を送る師遂に去る

師の吾教會の初に當り力を傳道及び小兒安息日學校并に浪華女學校の創立に竭し或の資を給して能く女兒を教育せり故に其教化を受け其恩澤に浴し學を成し業を遂げたる者寡からず又た其教を受る徒に婦女のみならず當時師が讚美歌を教ふるや衆未だ之に慣れず特は男子に於て然りとす其聲渾濁不調蛙鳴の如き者衆し之を教ふること甚だ難しと雖も師能く之を薰陶して遂に其音調清朗鶯歌の如き者あるに至らしむ豈

に其賜と謂ひざるべけんや

廿六年七月アレキサンドル教師轉じて東京に行かんとす衆復た大に別を悲しみ玉藤の別荘に會する者四教會凡そ百五十人師遂に去る

師の吾教會を生み且育てたる人あり故に衆之に倚憑すること赤子の慈母に於るが如し徒に親炙して其教化を受るのみならず凡百の事師の慈仁に訴へざるなく且其誘掖薰陶を受ること十年一日の如し豈に夫れ深く念ひ記して後進者に傳へ以て無窮に至らしめざる可けんや又た未有の困難起りしとき殊に師の心を傷ましめたること少からず夫れ教會に困難の起るの猶ほ人に病の起るがごとし人子を生む固より勞苦然れども猶ほ能く忍ぶべし其愛育したる後重病の起るに至りては其心の痛楚蓋し忍ぶ可からざるものあらん師の之を愛育して既に其成長を樂しむものなり思ふて此に至れば感慨に堪へざるもの亦た甚だ多し

同七月衆議して大塚武氏を長老に選舉し又會堂に火災保險を附せんことを

定む十月衆勤儉五年を期し資本を蓄積して生産事業を起さんとするの會を創立す是を恒産會と曰ふ蓋し恒の心あらしめんが爲にして野村兵八郎氏の發起するところあり是月福島講義所を轉じて堂島裏町三丁目に移し之を改めて堂島講義所と稱す是より高田利鎌氏此より住し毎週一回説教會并に小兒安息日學校を開く十一月火災保險會社と其契約を合せり。

十七年一月より廿六年十二月に至る信徒の異動左の如し

受洗	轉入	轉出	就眠	放逐	除名
一六四	六〇	五九	二四	六	三四
一八一	五九	六〇	三五	二	一三
四六	四	八	五	三	三
計 三九一	一二三	一二七	六四	一一	五〇

旅、現、在、行

十七年四月より廿六年十二月に至る教會の經費左の如し

計	現、在	行
四九三	一〇一	四五
五一八	一三〇	三八
一〇九	三一	九
計 一一、二〇二	二、二六二	九二

十七年	七十一圓九十九錢
十八年	三百五十一圓四十四錢二厘
十九年	三百四十五圓九十九錢六厘
二十年	三百三十圓十四錢三厘
二十一年	三百四十六圓六十五錢三厘
二十二年	五百九十四圓五錢八厘
二十三年	五百九十七圓九十二錢六厘
二十四年	二百九十四圓七十錢三厘
二十五年	三百九十一圓八十四錢六厘

二十六年

三百五十八圓七十三錢二厘

三十三

合計

三千六百八十三圓四十八錢九厘

但し會堂建築、修繕等の費額を合算すれば、通計五千四百八十一圓十九錢九厘にして、猶ほ臨時に支出したるものあり、其額分明ならざれども、大抵四五百圓以下らざるべし。

吾教會の信徒として明治學院に入り學既に成りて傳道師等になりたるの井上織夫、今田強、有馬純清の三氏、今入學中なるの笹倉彌吉氏、眠に就き其志を果さざりし、植田玄太郎、中山敬一の二氏あり、東京傳道學校に入り業を卒へ傳道者となりたるの森田覺治、菊池角平、品川小出海の三氏、今入學中なるの山縣茂雄、酒井懋男の二氏、眠に就きし、大西管次氏なり、女子傳道學校に入り業を卒へ傳道に従事するの、大西よう、村上ゆき、服部たか子等なり、此他中山國三氏も傳道者となり、又上村半四郎、岡部久吉、末永守正の三氏の監督教會の傳道者となれり、其他の分明ならず。

第八 諸會

安息日の禮拜の最初何れに會して之を志したるか、分明ならず、然れども、十五年五月既、アレキサンドル氏の館に於て、毎日曜日、夜祈禱、講義等の會をなしたることあるを、視れば、蓋し此に始まりしものならんか、説教所を松島に設け、尋で之を京町堀三丁目に移轉して、より近藤氏此に住す、其開會の毎週二回、よして、日曜日の午前と、金曜日の午後と、よなし、其説教のアレキサンドル、ポートル、近藤、笹尾の四氏之をなす、又説教所を老松町に設けて、より長谷川氏此に住す、其開會の毎週一回にして、日曜日の午後二時とし、其説教も亦アレキサンドル氏等之をなせり、加藤氏來てより、京町堀説教所を其上通、移轉し、近藤氏又此に住す、其開會時間を毎日曜日、の午後二時と、火曜日の夜間とに改め、其説教の加藤氏専ら之を担当す、尋で老松町説教所を高麗橋に移轉し、長谷川氏又此に住す、其開會時間を改めて午前とす、是に於て、安息日學校を開き、之を九時より始め、説教を十時より始むることとせり、是れ、十六年二月四日の

三十三

ことにして、吾教會午前十時に禮拜をさすは是を始とす。是より廿五年二月に至り之を改めて九時とせり。其會する者の數の廿一年三月以前及び廿五年七月以後の其記録を欠く。廿一年四月より廿五年六月に至るの間は於て。

最多数	廿二年九月	一回百五六十人
最少數	廿五年三四月	一回五六十人
平均數を以てすれば		

廿一年	百二人
廿二年	百二十一人
廿三年	百六人
廿四年	七十四人
廿五年	七十二人

安息日夜の説教の十七年九月より吉岡氏傳道の爲よ。中の島四丁目の宅に於て之を始めたるものよして爾後變更せしことなし。

祈禱會の十五年八月野邊氏の宅に於て始めて之を設け開會の夜間にして毎水曜日としたりしに。十六年二月之をアレキサンドル氏の館に移し其日を改めて火曜日となす。是より廿四年七月に至り復た之を改めて金曜日とせり。蓋し諸教會と同夜になすを便とし其協議より由て改めたるものなり。

安息日學校の十六年一月高麗橋説教所に於てアレキサンドル氏馬可傳を講ずるを始とす。開校の時間の一時間とし午前九時より始むることとしたりしを。廿五年二月に至り之を改めて十時とせり。

校長となりしに中山操太岡部久吉阿波松之助信時義政手塚誠哉加古光宮脇熊吉大塚武等の九氏にして一任のものあり再任のものあり任期の初め六月なりしを廿五年に至り之を改めて一年とせり。

教員となりしにアレキサンドル、ウヰン、ガルヴヰン、吉岡弘毅、野邊さそ、加古元、中山操太、手塚新八、川寛、ポートル、奥野昌綱、手塚誠哉、阿波松之助、信時義政、和田秀豊、ウード、ホール、若菜清河、渡邊爲藏、大石保、バルマー等の二十一氏其他の

詳ならず書記となりしハ渡邊爲藏氏あり。其教科ハ皆新約聖書ニ依リ之ヲ授ク。詩篇以賽亞書等舊約聖書を交ふるハ大石氏に始まる。

生徒の數ハ十九年四月より廿五年十月に至るの間に於て、

最多數	廿一年九月	一回百四十五人
最少數	廿五年十月	一回二十四五人
中數		一回自五六十人 至八九十人

右の前後の記録を欠く。

小兒安息日學校ハ十六年十月始めて堂島裏町松山氏の宅に開キ。十八年四月より仮會堂に移す。開校時間の午後二時より一時間とせり。校長となりしハガルヴヰン松山まつ野邊さと三森正信時義政の諸氏書記とありしハ阿波松之助山本らく石澤光三の二氏以後の校長之を兼ぬ。教員とありしハガルヴヰン松山まつ野邊さと青木まさ村井芳介高木某近藤

りん菊池とめ鳥海すゑ三森正岡部久吉八十川ます信時げん湯川うめ菅原源藏山縣茂雄神尾万七石澤光三山村五郎中山梅野信時義政中山源次郎村上ゆき吉川庚吉良うめ坂本まつ大橋ちよ輪島あい北條なを川田義夫望月すみ同姓さく山田滿國高田利鎌平山雅太郎の諸氏其他ハ分明ならず。生徒の數ハ十七年の比一時増加して一回集まる者五十人ニ及びしを後其父兄の嫌ふ所となり減じて二十五人許になりしことあり其より廿二年までの記録を欠く。廿二年一月以後に於て。

最多數	廿二年三月	一回凡六十人
最少數	廿四年七月	一回凡二十五人
中數		一回凡四十五人

經費ハ廿二年以前のことハ分明ならず。

廿三年	七圓五十錢餘
廿四年	六圓二十錢餘

廿五年

四圓七十錢餘

廿六年

一圓八十錢餘

右四年間の合計の二十圓四十八錢なり。

茲に此記を了る。山窓夜坐。熟ら教會の往事を回顧すれば。其經歷の路平坦
 ならず。或は進み或は退き。情々として憂ふ可きもの固り少からず。然れど
 も我儕在弱。幾多の艱難に遇て遂に此に達す。是職として神の恩に由らざ
 るの亦し。感じて是に至れば。亦た喜に堪へざる也。豈に謝辭あかるべけんや。
 抑も吾教會起りてより。茲に十年之を數ふるに。月を以てすれば。則ち百廿
 日を以てすれば。則ち三千六百五十時を以てすれば。則ち八万七千六百分
 を以てすれば。則ち五百二十五萬六千の光陰あり。更に秒を以てせば。其長
 さこと實に驚く可きものあらん。一分時短きが如しと雖も。而も六十秒の
 時間ありて。我儕の脈の凡そ七十の運動をなす。神若し其一を止め給ひ。

遂に死するに至らん。是より由て之を觀れば。僅に一秒時と雖も。神の恩に洩
 るることなし。嗚呼。其攝理の深遠なる。其恩の鮮少ならざる。こと一人の脈
 搏を以てするも。既此の如し。況や此長時間に於て。凡百の衆の團結せる
 教會の受たる恩に於てをや。其莫大なること。蓋し量る可からざるものあ
 らん。豈に獨り此に記したるが如き。著明なるもののみならず。や。教會起り
 て。熱心業を創め。自立して堂を賜へる。此間受たる恩の則ち著明なるもの
 なり。牧者に離れて憂愁し。合ふて復た欣喜す。此間受たる恩も亦た著明あ
 るものなり。牧師來て其堵を安じ。去て大に困難となる。此間受たる恩も亦
 た著明あるものあり。牧師定まりて和同し。更に中興の業とある。此に至り
 て受たる恩も亦た著明なるものなり。思ふて是に至れば。思想益す細微よ
 して神の恩の愈よ大あるを感ず。
 夫れ天の浩大ある日月星辰之に麗き。萬物覆はる地の廣厚ある山嶽河海
 之に紀し。萬物載せらる。而して神之を六日よ成し。其聖掌に置て恒に育し

給ふ神若し之を一打し給ひ天の震ひ地の動きて阿間の萬有の恰も此
山の落葉の如くにありて散らん嗚呼浩大にして無量なる其恩廣厚にし
て無涯なる其惠永く此の如し古人天地の道一言よして盡す可きなりと
云ふ然れども其主宰なる神の恩の大なるに至りての蓋し能く盡す可き
の言なからん殘灯影寒く宿病腦裡を攪亂し來る因て其聖徳を頌し其恩
惠を謝するも唯だ廣大無極深遠玄妙よして竟も辭なきに至るを以てし
且懇請するも今憂ふる所の者にして嚮に我儕の行歩を妨げし者再び生
じて前路を遮ることかく又た我儕の群を離れし者再び歸りて俱に基督
に屬せんことを以てす嗚呼往を顧み來を思へば神の恩の既も此の如し
行路坦ならずと雖も前程大に望あり我儕信仰惟一以て勁行直進す可き
なり。

附記此一卷の年の始に難波の北なる山里のいと静なるを愛で其處に七
日はかり籠居る間にものしたるわざなれば其あたりの柴人が伐出せる荒
木も均しき一本にあんそを此度梓にもせむとするも猶は足らぬとこ
ろをおぎなひなとして斯様よなしぬ固より嗚呼なる工あれど牧師のかく
物してよといはるゝがもたしがたきよよりてあひありけるかくて其本を
尋れば神の御山に生ひ出で恩の露ようるはひ十歳の間に根をはば枝さ
しそはりて稍も彌高よ聳え葉もいと多く茂りし愛たき材なれば良工の斧
よあはひよの教會の一柱ともなりぬべし己のたゞ伐出て其工の出るを待
つものあるがゆゑに飛彈人の打墨細の八條にわかれて其概略をのみ著し
つ但し其明細あるの元木ともいふべき舊記にありおのれ是まで其舊記を
讀む毎も教會を愛する情の興らぬこといなりき然る故に同胞よ此書よ
依りて其概略をしり舊記に依りて其明細なるをしり給へかし今此書にあ
らぬことをもかき交へ或の己が考を加へ殆木よ竹を繼たる如くなれるを

以て識者のわらひ給ふなめれと蓋事實のみを打つけよ書列ねたらむよの
あやなくて心をとらむべき所もおぼろかよ見すぐし一度讀ての後の埋木
となりて朽果つべければとてかくものしつれば同胞互に教會の往事など
打募ぶをりくよ取出或の物語の種はひともなし或の教誡の一となりて
教會を思ふ情の彌増さむこともあらばやとおもふ真心より書記せるよな
むかふれば同胞この拙をゆるし良工の出るまでの青柳の糸絶はすくりか
へしくて讀み給ひてよ

神山よ生ひたる木よの

ひと葉たよ

めぐみの露の

かゝらぬとまき

明治二十まり七とせといふ年の春

大阪北教會略史の後よ誌す

此書飯田平吉氏の編纂よ成る題して大阪北教會略史と稱
するハ吉岡弘毅氏の命だる處かりと云ふ我教會十年間の
記事網羅し盡くして亦漏す處なきが如し寧ろ教會の詳歴
史也

昔しイスラエル人弱兵を以て强悍無比のペリシテ人と戰
ふて之よ勝つエホバの祐助よ依りて也サムエル之が爲め
石柱を建てエホバこれ迄我儕を救ひ給へりと云ひて其名
をエベ子ゼル(救の石)と稱したりき思ふよイスラエル人此
石柱よ對し國家多難の日エホバの彼等に與へ給へる恩惠
を顧念し來らば感謝の念自から禁だる能ハざるものある

と共に更なる將來を仰げば希望の天地其眼前に躍如たるを認めしからん

過去十年の間我教會が幾多の困難障害を排除し得て遂に今日の發達を見るに至りたるもの一は神祐の大なる歸せざんばあらざらば此書ハこれ我教會のエペチゼルは非ざや我儕ハこれに依りて過去の神恩を感謝すると共に更に將來の希望を確實ならしむるものあるを覺ゆ蓋し今日迄我教會を助け給へる全能至愛のエホバの聖手ハ常久へは我儕と偕するを信まべければあり思ふに讀む人若し我儕と感と同ふせば此書編纂の目的亦達せりと云ふべき乎

大石 保誌す

明治廿七年四月廿三日印刷

明治廿七年五月一日 發行

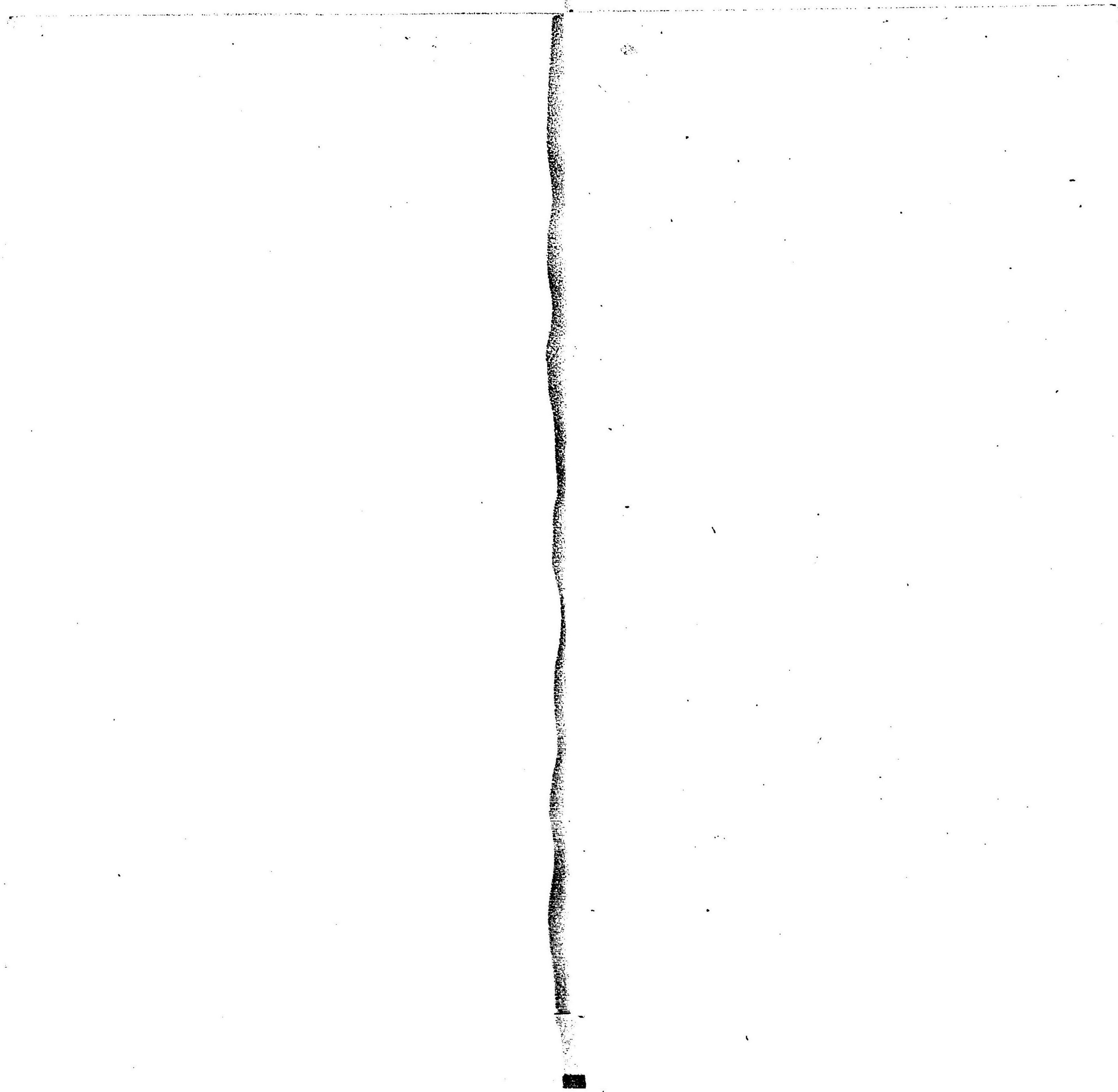
著者兼 發行者 飯田平吉

印刷者 今村謙吉

發行所 大阪北教會

印刷所 福音社

大阪府西成郡根崎村番外四十番屋敷
大阪府西區土佐堀三丁目三十八番屋敷
大阪府北區中ノ島常安町三十六番邸



27268

9
7

020285-000-4

特29-767

大阪北教会略史

飯田 平吉/編

M27

ABI-0091



特
29
767

